

【まえがき】

20 数年前にブラジルを初めて訪問したとき、多くの貧困者の存在に目を奪われました。日本とはあまりに異なる社会だと感じたからです。著しい格差を生み出した歴史や、格差によって規定される社会のあり方に関心を持ちました。それから今日まで、文化人類学の参与観察という調査方法で、路上で物を売る人びとと生活をともにしながら、断続的に調査研究を続けてきました。彼らから多くを学び、彼らの視点からブラジル社会を見ようと努めてきました。都市部の貧困層とともに暮らし、彼らの故郷である北部北東部を旅しました。ブラジルの路上商人たちと過ごした日々については、『貧困と連帯の人類学』（春風社、2017）と題した民族誌に記しました。

ブラジルは単に貧しいだけの社会ではありません。日本では経験したことのなかった桁違いの豊かさに触れたのもブラジルです。ブラジルで出会ったとても貧しい人びとと、とても豊かな人びとから、さまざまな刺激を受けてきました。

ブラジルの格差を考え続けるうちに目を向けることになったのが、私自身が生きる日本社会です。近年、日本の貧困の実態が少しずつ注目を集めるようになってきました。それでも、経済的に豊かで安定した社会だと思われている日本では、格差や貧困に関する理解が欠けているように感じます。貧困者の姿はブラジルでは可視的ですが、日本では見えにくくなっています。社会全体で、貧困の存在に気付かないふりをしているのかもしれませんが。私がブラジルの路上の貧困層を見て「日本にはない光景」と感じたように、ブラジルと日本の格差社会のあり方は異なっています。しかし、共通している部分もあります。ブラジルの貧困を考えることは、日本の貧困を考えることでもあります。より良い社会を実現するためには、自分の目指す社会像を具体的に描き出す必要があります。そのためには、まずは格差や貧困についての理解を深めなければなりません。ブラジル社会は、私たちが生きる社会の格差や貧困を理解し、望ましい公正な社会へと思考をつなげるためのヒントとなるはずです。